

音楽を紡ぐ喜び、浸る喜びを多くの人と共有したい——

学生時代にバロック音楽（17世紀初頭～18世紀半ばのヨーロッパ音楽）に魅了された鈴木さん。卒業後からプロの声楽家として活躍し、音楽の可能性を信じた挑戦を続けています。

【異国の地で出会った音楽】

バロック音楽との出会いは、学生時代を過ごした英國。その印象的な調べを聞き、すぐにとりこになつたと振り返ります。

「英國で学んだ5年間、その中で出会ったのがルネッサンス・バロック音楽でした。第一印象の優雅さ、端正さに心奪われ、留学期間を通して学ぶことを決意。在学中に所属していた聖歌隊では、イタリアの大聖堂でソリストとして歌う機会もいたりました。その経験もあってバロック音楽の中でも、聖歌や讃美歌などを歌う宗教声楽の道へ進むことを決めました」

アーティストを支援する『ふじのくに#エールアートプロジェクト』に私の企画が採択されました。バロック時代を代表する作曲家・ヘンデルが手がけた『燃えるようなバラ』を、ばらの丘公園の動画とともに紹介します

歌ったこの曲からは、当時の人々の感性を感じます。豪華に咲く風景は、現代の私たちが見ても美しいですからね。作品を通して、往年の人々の琴線に触れてもらえたうれしいです



バロック音楽の声楽家(メゾソプラノ)
鈴木美穂さん(本通一丁目)

【楽曲に息づく人間味を歌う】

約350年前に作られた数々の名曲には、現代の私たちも共感する詩が描かれていると鈴木さんは話します。「コロナ禍だった令和3年。外出自粛が求められた頃、

介するというもの。バラが咲き乱れる様子を贊美した曲を映像と一緒に紹介することでも、耳だけではなく目でも楽しんでもらいたいという思いで制作しました。時代が変わっても、変わらぬバラの美しさを

約350年前に作られた数々の名曲には、現代の私たちも共感する詩が描かれていると鈴木さんは話します。「コロナ禍だった令和3年。外出自粛が求められた頃、

約350年前に作られた数々の名曲には、現代の私たちも共感する詩が描かれていると鈴木さんは話します。「コロナ禍だった令和3年。外出自粛が求められた頃、



◎心を整えるために楽屋に持ち込むお守り(左上)
◎幅広い世代の出演者とともに第九を歌う鈴木さん(左下)